

回想片々

岡 谷 公 二

私は今年三月で定年を迎える。住居も創立時から勤務して三十六年——一所不定を好み、それまで職場も転々として変えてきた私にとって、自分自身さえ信じられない年月である。それだけ居心地がよかったということであろう。長い間には勿論、不愉快なこと、腹の立つこと、耐え難いこともいろいろあったけれども、回顧してみると、わがまを許してもらった、おだやかな、恵まれた時間だったと思う。

創立時、建物は本館だけで、校庭は実に広々としていた。雨上がりに、よく校庭で縄文土器の破片を拾ったものだ。科は国文科と美学美術史学科がなく、最初は一年生しかないのだから、放課後は学内は深閑としてまことにさびしかった。

志木駅は、木造の小さな田舎駅で、とりわけ南口ときた

ら、立ち食いのそば屋と小さなパチンコ屋があるだけだった。春さきの風の強い日など、ろくに舗装されていない駅前広場は黄塵に包まれた。

川越街道の沿道には、藁屋根の大きな農家が至るところにみられ、今は暗渠になっているが、大学近くの小川では、農家の人たちがよく大根を洗っていた。尤も大学周辺の風景は、そのころとそれほど変わってはいない。

学生数が少なかったせいか、先生と学生の間柄は、今よりも密で濃かった。なにしろ何遍か試験をして、やっと定員に達する、という時代だから、学生にもいろいろ異色の存在がいた。

数年前パリにしばらく住んでいたとき、オペラ座の近くの或る日本料理屋で、フランス語を教えた第一回の卒業生のTさんに三十年振りで会った。彼女は大学を卒業すると



すぐフランスに渡り
—— どういう動機
だったのか、その辺
はまだきいていない
——、フランス人の
画家と結婚したので
が、画家の死後、日
本人の板さんと再婚
して、パリでも指折
りのこの日本料理屋のおかみさんになっていたのである。
はじめのころの卒業生には、こうした破天荒な生き方をし
た人がほかに何人もいる。

学生紛争はなやかなりしころ、埼玉大の学生にオルグされ
たらしく、跡見にも、ほんの一握りながら、闘士が誕生し
た。彼女たちはヘルメットをかぶり、口に手拭いをまき、
旗を持って、或る日大学の中庭を行進した。研究室にやっ
てきて、ソファーに足を組んで坐わり、煙草をふかしなが
ら議論をふっかけてきた学生もいた。しかしほんのひとと
きだけのことで、彼女たちもまた、のどかな跡見の、のど
かな風景のひとつまにすぎなかったのである。

学長の飯野保先生は、入学式と卒業式にしか大学にあら
われず、実質上の学長は、学監の伊藤嘉夫先生だった。西

行の研究で知られた学者で「心の花」の歌人でもあり、ア
イデアの豊かな、面白い方だった。ただしワンマンで、教
授会はいつもあつという風に終わってしまった。先生の決
めたことを、一切議論抜きで、私たちは拝聴するだけだつ
たからである。やがて学内が民主化されるや、教授会は議
論百出して、深更に及ぶことさえあつた。そうした時には、
民主主義より独裁の方がいいと心底思ったこともある。

先生方の中でとりわけ印象深かつたのは、故藤田経世先
生である。先生は『校刊日本美術史料』という大著のある、
日本の中世美術の泰斗だった。長く文部省に居られたのだ
が、左翼的言動が災いして、そこを追われたのだ、と話さ
れたことがある。しかし戦闘的なところは少しもなく、悠
揚迫らぬ大人の風格があつた。細身の美男子だったが、背
筋がぴんとしていて、古武士のような、という形容詞が似
合う方でもあつた。ダンディで、茶のチエツクの、ラフな
服をみごとに着こなして居られたのをおぼえている。講義
振りは、謹厳そのものだったらしい。教授会ではほとんど
発言されなかつたけれども、勘所では、びしっと意見を言
われた。

先生は酒豪だった。三十すぎまでアルコールは一滴もあ
がらなかつたのに、たまたまフランスに留学した際、あち
らでは水よりもワインの方が安いので、レストランで水代

りに注文して飲んでいるうちに、すっかり腕が上つてしまつたのだ、とこれも自分で言われた。

新宿のクラブにお目あての女性がいて、何度もお伴させられた。何軒かはしごをして、そのクラブに来るころには、先生は大分御酩酊で、昼間の古武士の面影などどこにもなかつた。深夜、平塚まで帰るぐにやぐにやの先生の体を、タクシーに押しこむのが、鎌倉彫刻を教えていた、大学の同窓生の三山進と私の仕事だつた。

「岡谷君、日本酒はやめなさい。体には合成酒が一番ですよ」

先生は或る日、私にそう言われた。私は先生の言葉を信じ、その晩から晩酌の酒を合成酒に切り替えた。今では合成酒と言つてもピンとこない向きが多いだろうが、米を使わないで、清酒に近い味を出した合成酒は、当時よく飲まれたものだ。味もコクもないが、水のようにさらさらしてべとつかず、第一安いのがよかつた。

しばらくして先生が脳溢血で倒れた時、私はあわてた。先生の言葉には、もしかすると科学的根拠がないのでは無いのではないか、と思われたからだ。私はやがてまた、日本酒をのむようになった。つまり酒に關してまで先生に従うほど、私は先生を尊敬していたのである。